

エンディングC

阿望家の兄弟姉妹の視線は、5人の容疑者の誰にも向けられていなかった。

堇青 「黒岩、あなたは事件の前提を間違えていたのよ。犯人はシャンデリアの異音を聞けて、飛ばしのスマホをホール内に置ける人物。でも、犯人は事件のときメインホール内にはいなかった」

翡翠 「犯人はお昼にメインホールに来たとき、自分のスマホを通話中にしたままホール内に隠した。そして、そのスマホで盗聴してシャンデリアが落下する直前の異音を聞いたんです」

停電が起こる直前、堇青が「話を^そ逸らさないで」と言ったのは、通話相手が異音のことに言及したからだった。

つまり——シャンデリアの異音はスマホ越しに聞くことができたのだ。

日長 「飛ばしのスマホがホールに持ち込まれたのは、事件が終わってからだった。犯人は事件の後、俺たちの目の前で隠していた自分のスマホと持ち込んだスマホを入れ替えたんだ。殺人であることを証明すると言って、停電を起こしている間にな」

月長 「だからあのとき、あなたはわざわざ展示ケースの奥まで歩いていった。そこなら、スマホを隠してある南東の隅まで近いから。そうですね、^{いぬぼうざき}犬吠埼さん」

犬吠埼のスマホは手帳型のケースに入っていた。停電中にカバーケースを付け替えれば、2台のスマホを入れ替えたことにも気付かれずに済む。

停電発生装置へのスマホの登録も、記録されるのは分単位まで。停電が直ってすぐに、手元に戻ってきた自分のスマホを登録すれば、記録上は矛盾しない。

^{つらぬ}沈黙を貫く探偵に、翡翠が問い掛ける。

翡翠 「どうして……どうして父さんを殺したの？」

犬吠埼 「不在証明をしたかったんです。嘆きのダイヤに眠っているのはあなたの妻ではないと」

数日後、犬吠埼瑠璃は正式に逮捕された。

その後の家宅捜索で見つかったのは、彼女の犯行動機が記された手紙だった。

.....

探偵の手紙

皆さんがこの手紙を読んでいる頃には、私は嘆きのダイヤとともに姿を消しているはずです。あまり考えたくありませんが……もしもそうでないとしたら、きっと、皆さんは事件の謎を解いてしまったのでしょうかね。

これからするのは、私がどうして阿望^{つよし}剛さんを殺したのかの話です。

そしてこれは、どうして彼が嘆きのダイヤを手に入れ、皆さんを無理矢理に集めてまで宝石展を開いたのかの話でもあります。

事件の発端は20年前の阿望^{りんよう}燐葉さん——皆さんのお母様の死にあります。

燐葉さんの死を、剛さんは嘆きのダイヤのせいだと考えました。嘆きのダイヤには触れたものの魂を吸い取って死に追いやる、という噂もありましたから。

もしかすると、皆さんはここで少し変だと思われるかもしれません。

燐葉さんは嘆きのダイヤになんか触れていないはずだ、と。

普通に考えればその通りです。

燐葉さんは、嘆きのダイヤを握って飛び降り自殺した女性の死体を発見し、パニックになって通報せずに逃げただけなのですから。

その過程で嘆きのダイヤに触れる必要がありません。

しかし剛さんの行動を踏まえると、燐葉さんが嘆きのダイヤに触れたとしか考えられないのです。

多分に想像を含みますが、20年前に起きたのはこのようなことでしょう。

女性が嘆きのダイヤを握って飛び降り自殺し、地面にぶつかってダイヤが彼女の手から離れた。そして、その近くには当時6歳の月長さんがいた。彼はよくわからないまま、転がってきたダイヤを拾ってしまう。それに気付いた燐葉さんが月長さんからダイヤを取り上げ、女性の死体のもとに戻す。

このとき、燐葉さんは慌てていて、死体を月長さんから隠し^{そこ}損ねたのでしょうか。

月長さんは死体を目撃し、ショックで全てを忘れてしまった。

月長さんに20年前、事件当時の記憶がないのはこのせいでしょう。

おそらく、燐葉さんがパニックになって通報を忘れたというのも真実ではなく、本当は幼い月長さんを事件に巻き込みたくない一心だったのだと思います。

後の警察の捜査で燐葉さんが誤認逮捕されたことを考えれば、この行動もあながち間違いとは言えません。6歳児でも事故で人を殺してしまう可能性はありますから。

そういう訳で、燐葉さんは嘆きのダイヤに触れており、それを剛さんも知っていました。

そして彼はこう考えたんです。

もし嘆きのダイヤが魂を吸って人を殺すなら、殺された人の魂は嘆きのダイヤの中にいるはずだと。

だから彼は妻を殺した嘆きのダイヤを購入し手元に置いた。だから彼は皆さんを集め、宝石展を開いた。すべて家族揃って過ごすためだったんです。

堇青さんと日長さん、翡翠さんと月長さん、そして剛さんと燐葉さん——そこには家族6人が揃っていました。

少なくとも、阿望剛さんはそう信じていました。ずっとずっと、そこにいるのが燐葉さんであるように^{ふるま}振舞っていました。私までそう信じてしまいそうになるほどに。

だから私は彼を殺す計画を立てました。

彼を否定するために。彼が信じる燐葉さんを否定するために。嘆きのダイヤの中にいるのは燐葉さんではないと——不在証明するために。

.....

エピローグ

警察と対峙したあの日から一カ月半が経った。

堇青はますます弁護の依頼が増え、忙しく過ごしている。どうも逮捕しに来た警察を^{いっしゅう}一蹴したという噂が、彼女の評判を押し上げているようだ。

日長はここしばらく厄介な仕事を押し付けられていた。あの日協力してくれた元同業者が「貸しを返してもらおうぜ」と言ってきて以来、家にすら帰れない日々が続いた。

翡翠は長い間家に^{こも}籠っていた。そこで彼女が何を考え、何をしていたかはわからない。その間に不良品を販売していたという理由で何人かの業者が逮捕された。どうも警察に匿名の情報提供があったそうだ。

月長は20年前の記憶を取り戻した。それと時を同じくして、最近起きていたたびたび意識が飛ぶ症状も出なくなった。

月長 「20年前のあの日、僕は母さんと公園にいて……でも、誰かに呼ばれた気がして、一人で抜け出したんだ。そこに嘆きのダイヤが転がっていた」

月長 「僕はそれを拾って、それで……。人殺し、って叫ばれたんだ。少し離れたところに女性が血を流して倒れてた。彼女が僕を指差して——」

人殺し、人殺し、人殺し。

もう助からないと確信できるほどの血を流しながら、繰り返し叫んでいた。

月長 「そのときに母さんが来た。母さんは僕からダイヤを取り上げて、女性の手元に戻して、僕に言った。大丈夫、あなたは何も関係ない、何も怖いことはないから。それで僕の手を引っ張って家に戻ったんだ」

手を引かれながらも、月長は女性から目を離せなかった。彼女はまだ人殺しと繰り返している。

けれど、その瞳は月長を捉えていない。

視線の先にあるのは彼女自身の手握られたダイヤ。彼女は嘆きのダイヤに人殺しと言っていたのだ。

女性の瞳から光が薄れていく。最後に、彼女の唇が違う形に動いた。

——ごめんね……瑠璃……。

女性の手から^{こぼ}零れ落ちたダイヤは、夕日を反射して、まるで赤く輝いているように見えた。

ブルーダイヤの不在証明——終